



大阪+知的障害+地域+おもい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3430 号 2016.12.30 発行

ハンディばねに写真展 自分の体を素材に表現 両足義足の美術家・片山真理さん



東京新聞 2016年12月29日

片山真理さんが自らを撮影した作品（県立近代美術館提供）

両足義足の太田市に住む美術家、片山真理さん（29）による写真作品の特別展示が来年1月21日から、高崎市の県立近代美術館で始まる。生まれながら不自由な足を理由に、少女期から受け続けたいじめ、9歳で自ら下した足の切断。自身の体を素材に心の叫びを訴えるかのような表現力は、圧倒的な存在感を放っている。（菅原洋）

「気持ち悪い」「きもい」。小学生のころ、多感な時期の少女には、あまりにもむごい言葉の暴力が浴びせられた。

「死にたくなるほど落ち込んだ。不登校になった」。片山さんは打ち明ける。

「先天性脛骨（けいこつ）欠損症」。片山さんは十万人に〇・一人という極めてまれな難病を抱えて生まれた。

膝からの下の脛骨の一部がなく、成長に伴って足で体を支えにくくなる。足に大きな補装具を着け、その姿も含めいじめの標的となった。

九歳の時、人生の大きな岐路を迎えた。足で体を支えるのに限界となり、医師が切断か、車いすかという選択肢を示したのだ。

「足を切って義足でかわいい靴を履き、普通の見た目になりたい」

あどけない期待を抱き、左足は膝まで、右足はふくらはぎまでを残して切断。ところが、現実は過酷だった。中学、高校へ進んでも、義足姿に対していじめは陰湿になって続いた。

「自分から仲良くなろうとしても通じないのならば、自ら表現するしかない」。片山さんは美術家を志すようになった。

高校在学中の二〇〇五年、県立近代美術館で開かれた「群馬青年ビエンナーレ」に出品した立体作品で奨励賞を受賞。県立女子大美学美術史学科を卒業後、東京芸大大学院の先端芸術表現専攻を修了し、一二年には「アートアワードトーキョー丸の内」でグランプリに輝いた。

実は片山さんは左手の指も、生まれながら二本のみだ。その不自由な手で、人の腕などの立体作品を編み上げる。今回の特別展示では、それらを体に絡めるなどした姿を自ら撮影した写真作品約四十点を並べる。立体作品も出品する。

特別展示のテーマは、同美術館での受賞が自らの原点だったとの思いを込め、「帰途」にした。

片山さんの作品は「障害を強調している」と指摘されることもある。

しかし、片山さんの真意は異なる。「自分でも、障害者の体を美しいとは思えない。自己を表現しようとする、自然に自分の体を利用して撮影することになるだけ」

特別展示は三月二十日まで。観覧料は一般三百円、大学・高校生百五十円、中学生以下は無料。原則月曜休館。

「家族介入」で早期治療 専門家が依存症対処法を解説

大阪日日新聞 2016年12月29日

ギャンブルをはじめ、アルコールや薬物の依存症に関するセミナーが大阪市中央区大手前1丁目のドンセンターで開かれた。奈良、沖縄両県を拠点に啓発活動する一般財団法人ワンネスグループが当事者の家族ら約20人を迎え、実践中の対処法を提示。当事者と家族の間に入り、依存症から回復する動機付けを行う「インタベンション（家族介入）」の手法を紹介した。

依存症の対処法を紹介する大田さん

セミナーは24日にあり、講師を務めた同グループの大田宏充さん（41）は、金を無心する依存症当事者の求めに応じる家族の心理状態について「当事者が家庭の内外で問題を起こすことを防ぎたい。体裁があるからだ」と分析。大田さんらが実践する「家族介入」の利点として「客観的に当事者や家族を見ることができ、感情に巻き込まれない」と説いた。

受講者の「（当事者を）家族から隔離することか」との質問に対し、大田さんは「違った愛の形だ」と説明。家族介入によって早期治療につなげる必要性を話した。

セミナーでは薬物依存症の男性（32）もマイクを持ち、回復に向けた体験談を紹介。「考え方が変われば行動が変わり、習慣や人生が変わる」と語った。息子のパチンコ依存症を心配する受講者の女性（75）は「依存症経験者が元気に話していると勇気づけられる」と話していた。

依存症対策を巡っては、カジノを中心とする統合型リゾート施設（IR）整備推進法成立を受けて実態把握に乗り出す政府の意向が明らかになったばかり。大田さんは「依存症当事者が何を苦しんでいるのか知ってほしい」と対策の実効性を求めている。



認知症疑いの親 運転をやめてもらうコツは

日経 Gooday 2016年12月30日

説得してもうまくいかない場合に、鍵を隠すなどして、やめさせることに成功したケースも (c) Andres Rodriguez-123rf



認知症が疑われる高齢者による自動車事故のニュースが増えている。もし自分の親が事故を起こしたらどうしようと心配になる人も少なくないだろう。事故を起こしてしまう前に運転をやめてほしいが、まだしっかりしている人に運転をやめるとは言いにくい。どのタイミングでやめてもらうのがいいのか。また、具体的にどう説得すればいいのか。認知症の人と家族の会

全国本部の副代表理事でもある川崎幸クリニック院長の杉山孝博さんに話を聞いた。

■運転をやめてもらうタイミングは？

「認知症と診断されたら、免許は返上しなければなりません。もちろん、安全のために、認知症の兆候が出た段階で運転はやめてもらう必要があります」と川崎幸クリニック院長の杉山孝博さんは言う。

ただし、認知症は今日から認知症と区切れるものではない。徐々に進行していくため、認知症になっても周囲が気付きにくいケースも少なくない。運転をやめさせるタイミングとして、見逃してはならない変化は何だろうか。杉山さんによれば、次の8項目のうち、ひとつでも当てはまれば、やめさせるタイミングになるという。

杉山先生の話に基づき編集部で作成

こうした兆候に注意しつつ、例えば、壁をこすってしまったたり、標識を見落とししたりなど、本人が運転に不安を感じた時に「危ないから運転をやめようね」と、説得すると比較的うまくいくことが多いそうだ。

■運転をやめさせるコツはあるか

認知症の疑いがある親に「人身事故でも起こしたらどうするの？もう運転はやめたほうがいいよ」と言っても、「何年運転してきたと思っているんだ。ばかにするな」と聞き入れてもらえないケースも少なくないだろう。どうすればいいのだろうか。

「危ないから運転をやめろと言っても、認知症になると頑固になって、特に介護者である身近な家族の言うことはなかなか聞いてくれなくなります」と杉山さんは話す。

ではどうすればいいのか。

「家族の言うことに耳を貸さない人でも、友人や医者 of 言うことは聞いてくれる場合は多いので、友だちや主治医から話してもらうのも一案です」と杉山さん。孫に「心配だから」と言ってもらうことで、やめさせられたケースもあるという。

一方、説得してもうまくいかない場合は、車のバッテリーを上げて「故障して動かなくなった」と言い、あとは「修理に出した」と隠してしまうケース、あるいは車のキーが見つからないようにするケースなど、半ば強制的にやめさせることに成功した例もあるという。

「様々な人に説得してもらっても、聞き入れてもらえない場合には、強制的に車から引き離してしまうのもやむを得ません。無理に運転をやめさせると、認知症が進むのではないかと考えるご家族もいるようですが、認知症はいずれ進むものです。それに、事故は起こしてからでは取り返しがつきません」と杉山さんは話す。

もちろん、認知症の疑いがあっても高齢者が運転をやめられない理由には、「運転するのが好きだから」だけでなく、「運転できないと生活や仕事が成り立たないから」というものもある。地域によっては車がないと「買い物に行けない」「病院に行けない」「友だちと会うこともできない」となってしまう。そうしたケースを考えると、認知症になった高齢者に自動車の運転を諦めてもらう一方で、それに代わる交通手段といったインフラも、急ぎ整備していく必要がある。

その話はまた別の機会に譲るが、まとめとして強調したいのは、運転をやめさせるには、認知症の疑いがある高齢者の気持ちを理解して、その人その人にあつた対応をすることの大切さだ。これがダメなら、別の方法、それもダメならまた別の方法というように、やめてもらうまで根気よく続けることが重要だ。

【認知症の疑いがある高齢者が免許返納できない主な理由】

- 1.車に乗るのが楽しいから
- 2.生活や仕事に必要だから

【運転をやめたほうが良い行動チェックリスト】

① 運転をしていて道に迷うようになった	
② 運転が乱暴になった	
③ 急に車線変更をするようになった	
④ 通常3分で行けるところなのに、時間がかなりかかるようになった	
⑤ 車に擦った痕や小さくへこんだ痕など傷をつけるようになった	
⑥ 一緒に同乗していて運転が怖いと感じるようになった	
⑦ 本人が運転に対する不安を口にするようになった	
⑧ 標識を見逃し、一方通行の道を逆走したり、左折できないところを曲がろうとしたりするようになった	

- 3.運転に自信があるから
- 4.免許が身分証明書代わりだから

【運転をやめさせるための工夫】

- 1.車がなくても生活に支障がないように整備する
- 2.運転の仕方、事故への不安をさりげなく話して自発的に運転をやめるよう促す
- 3.車を壁にこすってしまったたり、標識を見落としたりして、本人が運転に不安を感じた時に、危ないから運転をやめようねと、説得する
- 4.免許を返納すると、「運転経歴証明書」を申請できる。これが身分証明書の代わりとなることを説明する
(ライター 伊藤左知子)

■この人に聞きました

杉山孝博(すぎやま・たかひろ)さん

川崎幸(さいわい)クリニック院長。1947年愛知県生まれ。東京大学医学部附属病院での内科研修を経て1975年川崎幸病院に内科医として勤務。1998年9月川崎幸病院の外来部門を独立させて川崎幸クリニックが設立し院長に就任、現在に至る。公益社団法人認知症の人と家族の会(旧呆け老人をかかえる家族の会)全国本部の副代表理事、神奈川県支部代表。公益社団法人日本認知症グループホーム協会顧問。「これでわかる 認知症」(成美堂出版)、「認知症の人のつらい気持ちがわかる本」(講談社)など多数。

加入団体マップ改訂 発達障害支援JDDネット愛媛 愛媛新聞 2016年12月29日



県内の発達障害児・者支援団体をまとめたマップ

県内の発達障害児・者支援団体などで作る日本発達障害ネットワーク(JDDネット)愛媛(田中輝和代表)はこのほど、「加入団体マップ」(A4判)を7千部作成した。2011年に発行したマップを5年ぶりに改訂。保護者や当事者による16団体の活動内容やメッセージを掲載している。

改訂版は松山市の補助金を活用して作った。高機能自閉症、アスペルガー症候群などの子どもを育てる中予の保護者の会「ダンボクラブ」が編集し、各団体が実施している定例会の日程や連絡先などを一覧表にまとめた。

活動への思いをつづったメッセージも紹介。「自閉症や発達障害の子どもたちを学童期から成人まで、みんなで支え合っていきましょう」「人には言えない不安や悩みを相談し合える場になればうれしい」などと同じ境遇にある保護者らの参加を呼び掛ける。

このほか、JDDネット愛媛に加盟する専門機関や職能団体など県内12団体について記載した。

田中代表(55)は「地域のニーズを受け、この5年で保護者・当事者団体は増えている。発達障害の子どもをどう支援するか悩んでいる人は多く、孤立を防ぎたい。身近なところに仲間がいるので、マップを役立ててもらえれば」と話している。

マップは各団体を通して、行政や相談支援機関に配布する予定。問い合わせはJDDネット愛媛=メール jddnetehime@hotmail.co.jp

子どもの防犯意識向上 めんこゲーム「ガチ☆メン」考案

大阪日日新聞 2016年12月29日

独自のめんこを考案し、子どもの防犯意識向上に役立てる大阪市生野区役所の試みが、住民や区内で働く人たちをつなぐツールとなっている。競技開始前に標語を読み上げるルールがポイント。世代を超えた交流の場や学校別の大会が開かれ、関係者らは「人のつな

がりで区を発展させていければ」と思いを込めている。

生野区は2009年度、子どもたちが事件に遭遇した際に役立つ防犯標語「いかのおすし」があるのを踏まえ、事件事故を未然に防ぐ「おこのみやき」を提唱。「お」は「大きな声であいさつしよう!」、「こ」は「交通ルールを守ろう!」といった具合だ。標語の浸透を図ろうと同時期にめんこゲーム「ガチ☆メン」を開発した。

区職員が審判を務める中、子どもがめんこゲームに熱中した競技大会



その後、子どもが引きつけられるようカードゲームのようなルールも設定。「2回連続でスロー（投げ付け）できる」といった効果がある「スキルカード」を用意し、区内各地で開かれるめんこ企画に参加すればもらえるようにしている。ゲームの盛り上げに役立つスキルカード

■共有できる競技

「や! 約束事は守ろう!」

11日に区が区役所で開いた第6回ガチ☆メン競技大会には小学生ら約90人が参加した。積み上げた15枚のめんこに自分のめんこを投げ付け、制限時間内に相手よりも多くひっくり返した方が勝利。子どもらは真剣な表情で腕を振り下ろし、結果に一喜一憂していた。

ゲームの最初に標語6項目のうちいずれか1項目を読み上げるのがルールで、「お」と「や」の標語を覚えていた小学1年の竹田尚樹君（7）は「ひっくり返った時が面白い」と楽しんでた。

小学生部門を中心に一般の部も開かれ、78歳の男性も参加。区地域まちづくり課の比奈本厚主任は「めんこなので世代を超えて競技に参加してもらえる」と説明する。

■職員が審判

小学校対抗の大会は11年度からスタート。5人对5人の対戦方式で、今は小学校19校のうち16校が参加している。生野区PTA協議会の北山泰利会長（55）は「区の子どもの数が減って統合の話も出る中、学校間のつながりづくりにもなる」と指摘する。

各大会の景品は地元の協賛企業が用意。区によると住民が地域の企業を知るきっかけになっているという。

「アルペジオ」は、歩けば音が鳴って周囲に注意を促す鈴「みまもりベル」を提供。荒木健治社長（67）は「交通安全の取り組みを生野区から発信し、大阪を活性化していきたい」との思いだ。

区役所が主催する大会は職員が審判を務めているのも特徴で、顔見知りになった子どもと職員が町中であいさつを交わすことも。清野善剛区長は「区にかかわる人と人とを子どもを中心に結び付けている」と取り組みに手応えを感じている。



5市が国上回る 大阪府内市町村職員給与

大阪日日新聞 2016年12月29日

大阪府は27日、市町村職員の給与状況を公表した。国家公務員の給与を100とした場合の地方公務員の水準を示すラスパイレス指数（4月1日時点）が100を超えたのは43市町村中、富田林市（102・0）など5市で、前年の7市町から2団体減った。一方、実際の役職より給与をかさ上げする「わたり」は6市で制度が残っていた。府は「引き続き廃止を求める」としている。

100を超えたのは、ほかに東大阪市100・8▽堺市、大阪狭山市100・5▽豊中

市100・2ーだった。低かったのは泉佐野市92・1▽豊能町92・4ーなど。大阪市は全国の政令市で最も低い94・2だった。

総務省によると4月時点で、府内で「わたり」が残っていたのは、池田市、高槻市、貝塚市、茨木市、摂津市、泉南市で、前年に比べて4団体減った。国が廃止を求めている自宅に関する住居手当の制度は、箕面市で残っていた。

真心いっぱい おせち料理 上松町 お年寄りらに届ける



信濃毎日新聞 2016年12月30日

「まごころおせち」を盛り付けるボランティアら

木曾郡上松町の町社会福祉協議会は29日、町民から募ったボランティアや町職員と共におせち料理を作り、1人暮らしのお年寄りや高齢者世帯、障害者ら計67人に届けた。「まごころおせち」と名付けて1997年から続けており、毎年楽しみにしている人も多いという。

料理作り会場の町健康増進センターには、男性1人を含む17人が集まった。朝から、サツマイモやリンゴを使った「リンゴ芋きんとん」や、昆布巻き、コンニャクの白あえ、煮物など色鮮やかな8品を作り、「立派ねえ」「いい感じ」などと言いながら、八角形の容器に飾り付けた。

自営業の荒岡千代子さん(65)は「年末で自分の家のことも気になる」と言いつつ、ボランティアとして4回目の参加。「手が込んだ料理が多く、勉強になる。お年寄りの人には、この料理で正月気分を味わってほしい」と話していた。配達でも町職員が手伝い、各家を回った。

社説 少子化と保育 まだ危機感が足りない

毎日新聞 2016年12月30日

今年生まれる子供の数は統計を取り始めた1899年以降、初めて100万人を下回る見通しだ。今後も出生率が大幅に改善しない限り、最も多かった1949年(約270万人)の3分の1程度になる。安心して子供を産める環境を整えないと、日本は縮小していくばかりだ。

今年は保育所に入れなかった人の「保育園落ちた日本死ね!!!」という匿名ブログが発端となって母親たちの怒りが噴出し、政治を動かした年だった。

保育所の不足による待機児童問題は深刻だ。厚生労働省によると4月時点の待機児童は2万3553人だが、育児休業を延長している場合などは集計に含まれない。こうした「隠れ待機児童」は6万7354人にも上る。

都市部を中心に待機児童を多く抱える自治体は保育所の新設を進めているが、保育士の確保が追いつかず難航している。仕事が大変な割に賃金は全産業の平均より月10万円も低く、それが保育士不足の原因と言われてきた。

このため政府は来年度予算に540億円を計上し、全保育士の月給を6000円程度増やすほか、技能や経験を積んだベテラン職員はさらに4万円を上乗せする。保育士として働き続ける動機付けとしては効果があるだろう。

しかし、現実には経験が7年以下の保育士が全体の半数以上を占めている。6000円増えても、まだ月給が18万円程度にとどまる人は少なくない。一段の上乗せが必要だ。

総収入に占める人件費の割合が極端に低い保育所が多数あることも指摘されている。国が待機児童解消のために予算を増やしても、保育士の賃金に回らなければ意味がない。低賃金で若い保育士を酷使する保育所には厳しいチェックが必要だ。

保育士資格を持ちながら働いていない「潜在保育士」も約76万人に上る。低賃金とともに子育てや家庭生活との両立が難しいためとされる。正職員でないと保育所内での立場や処遇がさらに悪いためパートで働くことも控えている人が多い。もっとパートの処遇改善に力を入れるべきだ。

また、国が定めた職員配置基準では、4歳児以上は子供30人に保育士1人だが、0歳児は3人に保育士1人と定められている。多くの保育士が必要な0歳児を家庭で育てられるようにすれば、待機児童の解消には大きな効果がある。男性も含めて育児休業をもっと取ることができるようにすべきだ。

これから現役世代の女性の数はさらに減っていく。あらゆる政策を動員して出生率を改善しないと、人口減少に歯止めが掛からなくなる。

社説：岩手・矢巾中2自殺／いじめの認定胸に刻んで 河北新報 2016年12月30日

なぜ、最悪の事態を防げなかったのか。そんな思いが改めて強まる。

岩手県矢巾町の中学2年村松亮さん＝当時（13）＝が昨年7月、いじめを苦にして自殺した問題で、有識者による第三者委員会は町教委に報告書を提出した。

村松さんへの継続したいじめが「死にたい」と考える一因となったと認定し、「学校の対応が極めて不十分だった」と結論付けた。

報告書によると、1年生の部活動で技術が未熟だったにもかかわらず、部員から失敗を責めるような言動を受けた。2年生になると教室内で同級生4人から顔を殴られたり、机に頭を押し付けられたりした。昨年7月にいじめ6件を認定した学校の報告書には含まれない事案もあった。

第三者委は「個別にいじめを認定するのではなく、一連の事実の積み重ねをいじめと認定した」と説明。一つ一つの出来事は、からかいなどに見えても、継続的に受けることによって大きな苦痛がのしかかったと推察した。

同級生の少年1人は村松さんへの暴行容疑で盛岡家裁に送致されたが、刑事裁判の無罪判決に当たる不処分となった。司法の判断とは別に、第三者委が継続的ないじめを認定した意味は重い。

いじめに耐えながらも、最後は追い詰められた13歳。どんな気持ちだったのかと思うと胸が痛む。教育関係者は報告書の内容を肝に銘じるべきだ。同じような悲劇を繰り返してはならない。

報告書は、学校の対応の不備を厳しく指摘した。村松さんの周囲で起きたもめ事の対応を担当教諭に任せ、学校全体で情報を共有していなかったと認定した。

学年主任と担任教諭の関係にも言及し「生徒指導観で違いがあり、コミュニケーションを取って支え合うのではなく独立独歩の関係と周囲からは見えていた」と強調。担任が他の教員に相談せず抱え込む遠因になったと分析した。

村松さんが担任とやりとりしていた生活記録ノートには、「死」が6回記されたが、担任は「気を引くため」との理解にとどまった。ノートに「死」が書かれていたのを保護者に伝えなかったことも明らかになった。

浮き彫りになったのは、校長ら教員たちに「いじめはない」との過信があったことだ。全国で繰り返されてきたいじめ問題を通じ学んだはずの対処法は、組織に浸透していなかった。校長が出した「命の意味を教職員が常に考えていかなければならないのだと、思いを新たにしている」という談話にむなしさが募る。

村松さんの死を改めて胸に刻みたい。報告書は担任教諭を孤立させない学校全体の連携があれば、悲劇は防げたことを示唆している。関係者が取り組むべきは、いじめを敏感に捉えながら根絶に力を尽くすことである。

論説：2016年回顧 国内 列島が災害に揺れた1年 佐賀新聞 2016年12月30日

2016年を振り返ると、私たちの価値観や常識が大きく揺さぶられた1年ではなかったか。とりわけ「熊本地震」は、九州では大地震は起きないという根拠のない思い込みをあっけなく打ち砕いた。

熊本地震は、最初の地震から揺れが小さくなる「本震－余震」型ではなく、「前震－本震」型で、震度7の強い揺れが2回も襲った。これは、観測史上初めての経験であり、前震はどうか持ちこたえた住宅が本震で崩れてしまい、その下敷きになった被災者も少なくなかった。

復興は道半ばだ。いまだに熊本城は無残な姿をさらし、阿蘇周辺では交通網が分断されたままである。倒壊した住宅が放置されている地域もある。風化させず、息長く支援していかねばならない。

その大きな揺れは佐賀県内にも及び、最大震度5強を記録した。

今年は熊本だけでなく、列島各地が災害に見舞われた。台風10号が東北の太平洋側から上陸し、岩手県では高齢者福祉施設の入居者が犠牲になった。新潟県糸魚川市の大火では、多くの市民が焼け出された。

そして、茨城県では震度6弱の強い地震まで起きた。東日本大震災から5年以上がたっても、これは震災の余震なのだという。

もはや、いっどこで大規模災害が起きてもおかしくはない。いかに災害に備えるか。私たち一人一人が防災意識を高めて命を守る行動を身につける必要があるのだと痛感させられる。

福岡市で起きた道路大規模陥没事故にしても、大都市の真ん中にぽっかりと穴が空いた光景は衝撃だった。その後の修復のスピードに「日本の底力を示した」と賞賛もあったが、これから先のインフラ整備・維持の在り方を見直すきっかけとすべきだろう。

凄惨な事件や事故も相次いだ。相模原市の障害者福祉施設では、元職員の男が「障害者は生きていても仕方がない」と凶行に走った。高齢ドライバーによる事故の多発は、私たちの社会が超高齢化に迫りついていない実態を浮き彫りにした。

ご高齢を理由に天皇陛下が示された「退位」のご意向は、多くの国民が驚きをもって受け止めた。退位に向けた議論が進むが、将来の皇室の在り方も合わせて考えておく必要があるだろう。

終戦から70年以上が過ぎ、戦後にけじめを付ける動きもあった。米国のオバマ大統領が現職の大統領として初めて被爆地・広島を訪問し、呼応するように安倍晋三首相が真珠湾で花を手向けた。

かつての戦勝国と敗戦国がともに死者を悼み、「和解」を世界に示す。価値観の違いなどで分断され、テロが広がる現状を踏まえれば、負の連鎖を断ち切ろうというメッセージには意味がある。

18歳選挙権もスタートした。都知事選では、自民党から公認が得られずに出馬した小池百合子氏が既存政党を破り、“小池劇場”で有権者の関心を引きつけた。

ブラジル・リオ五輪では日本勢が躍動し、2020年東京五輪のカウントダウンも始まった。東日本大震災から復興した姿を世界に示す。そのためにも、いかに安全・安心を高め、災害に強い国をつくるか。新たな年がその第一歩となるようお願いしたい。(古賀史生)

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

